

外貨建て保険の国際金融・学部生用講義への取り込みの重要性

小川健(おがわ・たけし) (専修大学・経済学部・准教授)*

概要

本稿では外貨建て保険について国際金融・学部生用講義に取り込む重要性を取り上げる。為替リスクが全面的に影響するのに、新社会人にも勧誘が来ながら 30 年以上の契約が必要になる外貨建て保険に際して、通常の学部生の国際金融の講義での為替リスクの理解だけだと、適切な判断ができないまま契約をすることになりかねない。こうした為替リスクは従来の保険論に無い項目なので、為替リスクを扱う科目において扱う重要性を取り上げる。

キーワード: 外貨建て保険, 為替リスク, 利回り

1. はじめに

日本がゼロ金利政策の導入を始めて以来、低金利の時代が 20 年近く続いていて、2016(平成 28)年にはマイナス金利の導入が(ヨーロッパ中央銀行等に続いて)一部始まった。こうした低金利の中で、日本円建ての保険については運用益が充分に見込めないことから、保険金に対して保険料が高くなる状況が続いている。その中で日本円市場よりは比較的高利回りとなる外貨市場を活用して同じ価値の保険金に対し実質的な保険料を抑える手法が注目されている。しかし、保険会社が大きな為替リスクを背負いきれないことから、保険料・保険金の水準を外貨で契約する外貨建て保険に注目が集まっていて、銀行等では 2010 年代後半には投資信託に代わっての販売が行われてきた。こうした外貨建て保険は日本以外にもシンガポールを初め色々な国で行われている[1]。

しかし、外貨建て保険には保険料・保険金共に外貨で設定して為替リスクを(保険会社ではなく)契約者が負う代わりに比較的高利回りとなる外貨市場を活用でき、同じ価値の保険金に対し保険料を比較的抑えられる仕組みであるため、為替リスクが非常に大きく影響する。この点は通常の保険論ではあまり重視されない項目であるために、一般の保険販売とは異なる知見が必要となる。また、一部の商品においては手数料のぼったくりが問題になる事案もある[2]。そうした事案などもあり、外貨建て保険不要論が出ることもある[3]。

それらの場合も含めて、(保険会社からの販売員などによる販売の場合には、販売員だけで契約できなく、本部などにその場で電話をかけ、為替リスクに関する質問に答えないと販売ができないようにしているジブラルタ生命などの事例などと比べ)特に銀行窓口を利用した代理販売を中心に、為替リスクに対する説明等を充分に行って契約予定者が承諾するという形ができていないままの契約トラブルが多発している[4]。生命保険協会によると銀行での窓口販売での説明に不十分な点が見られるとされ[5]、生命保険協会が外貨建て保険の販売資格の新規創設を表明するまでの事

* 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田二丁目 1 番 1 号 生田 9 号館 7 階 9710 号室
(090)4255-1796 takeshi.ogawa.123@gmail.com

態に至った[6]。

外貨建て保険の取り扱いについては為替リスクに関する理解が非常に必要になる項目である反面、卒業直後の一般の新人などにも販売勧誘事案がある事から、大学在学中の教育が非常に大事になるだけでなく、その契約には30年以上の長期的な契約もあるだけに大きい。しかも、そこでの知見は通常の為替リスクに関する理解だけでは(通常は為替変動の影響は輸出入を中心に説明することが多いため)直ぐには判断し難い、外貨建て保険の枠組みに即した理解が必要になる反面、そこでの鉄則については最悪覚えるだけでも重要な判断指標となるだけに、直接外貨建て保険について扱う重要性は高い。為替リスクは国際金融の学部生講義の中で扱う重要性は高い。

しかも、新型コロナ(COVID-19)の影響で外国の市場における金利引き下げなどが外貨建て保険の販売停止につながった事案もあり[7](一部はその後再開[8]), そうした仕組み理解上も非常に重要となる。

そこで本報告では「明日から講義に使える」を目標に、外貨建て保険の国際金融・学部生用講義への取り込みを想定した報告を行う。この項目を取り入れた専修大学・経済学部・経済学科用(2年生以上向け)講義「国際経済論2」での報告の項目も(解説映像[9]と合わせて)提示する。

2. 外貨建て保険の外貨で決まる保険料とその対策

外貨建て保険は日本では生命保険を中心に構成され、外貨で保険料・保険金の水準が決まり、その運用は主に外貨市場にて行われる。そのため、日本円など邦貨建てに換算した保険料水準は為替レートの変動により毎月変わる状況になる。

外貨建て保険の中には事前一括払いの形式もあるが、手持ちの余っている外貨を利用した事前一括払いと異なり、日本円換算分を事前一括払いの場合にはその後の為替レート変動を考えると毎月払いの場合に比べ為替リスクが大きくなることが指摘されている[1]。

毎月の支払いの場合に話を戻すと保険料水準は外貨で決まっているが、保険料の支払いについて外貨で直接支払える場合と、日本円での外貨相当分を支払う形式がある。後者(日本円での外貨相当分)については、毎月日本円換算の保険料が変わる為替リスクが直撃する。この水準は(30年以上支払い続けるような契約もある中で)為替レートの変動が大きくなると直撃する項目がある。例えば2011(平成23)年頃はUS\$1.-≒77円であったのが2019(令和元)年頃はUS\$1.-≒110円に円安US\$高へと為替レートは大きく変わった。この場合だと契約の内容(特に保障内容)が変わらないまま日本円換算の保険料だけ約43%引き上がることになり、契約を解除せざるを得ない可能性が出るのが分かる。これらの事案ではUS\$1.-≒77円のような歴史的な円高US\$安の場合には、その水準での日本円換算の保険料だけを見て飛びついてしまっただけで支払いきれなくなる危険性もあり、為替レートが減価(円安)になると邦貨(日本円)換算の保険料が(契約が変わらないのに)増える点は注意が必要となる。

これらを考えると、手持ちの外貨などを利用して保険料を払えることは非常に大事になる。手持ちの外貨がない場合でも自分で外貨にて支払える状況であれば、先渡(フォワード)や先物(フューチャーズ)、オプションなどのデリバティブ取引を駆使しての為替リスクを自分で管理した外貨の確

保等もできるようになる。為替リスクに対するデリバティブ取引は変動為替レートを制度として正当化する上で非常に重要になる。授業内容などを考えても、国際金融の学部生用講義でデリバティブ取引を取り上げる重要性も高く、関連した有機的な講義内容とできる。また、外貨安の時に将来の保険料の支払いに使える外貨を確保しておき、支払うというより原理的な手法も可能になる。

そのため、外貨建て保険を契約する際に、確認すべき次の鉄則が出てくることになる。

鉄則1：外貨での保険料支払いが可能な外貨建て保険の契約であること

この部分には注意が必要になる。

例えば、著者が実際に契約している例を取り上げると、(1)日本円換算での保険料支払いのみとなっていて、外貨での保険料支払いができない事案もある。(2)外貨での保険料支払いはその都度の振り込み(支払い)なら出来るが、外貨預金からの自動引き落としはできない事案もある。

次に、日本円換算での保険料を支払う場合には、外貨に換算する場合の為替両替手数料が出てくることになる。この水準が高い場合には手数料ばかり高くて運用に回せる割合が減ってしまうので、そもそも契約に適さない保険契約である可能性が高い。この手数料の問題は他の部分にも同様に言えるので、次の鉄則が出てくる。

鉄則2：手数料が必要以上に高くない契約であること

続いて保険金に関する部分になる。

3. 外貨建て保険の外貨で決まる保険金とその対策

続いて外貨建て保険の持つ、外貨で保険金が決まる部分とその対策について取り上げる。

外貨建て保険は外貨で保険金が決まるので、日本円換算の保険金は為替レートの変動によって大きく変わることになる。しかも保険金には一括して支払われる契約もあり、この為替レートの影響は少なくない。通常、保険は満期まで続ければ元本保証のイメージが強いが、外貨建て保険は「外貨換算での」元本保証になっている機会が多い。そうすると、日本円に換算した場合の保険料・保険金は変動する結果、保険金支払い時に円高(増価)の場合には、日本円で換算した払い込み総額に対し保険金の日本円換算では元本割れを起こす可能性がある。こうした可能性があることを理解できない段階での契約はそもそもなすべきではない。以下はこの部分は踏まえての記載となる。

外貨建て保険の中には30年以上の長期で保険料を支払っていく契約などもあり、一括支払いでの運用の場合にも数年以上は満期までにはかかる。そうした契約の中で、保険料の支払い完了(満期)まであと数か月の場合には、保険料はほぼ払い込みが済んでいる段階になっている場合が多い。その場合には、これから増価(円高)になる予測が経った場合には満期まで待つてしまうと保険金の邦貨(日本円)換算の金額は目減りすることが懸念される。そのため、日本円建ての保険には無い特徴として、満期直前の段階でこれから増価(円高)に向かう予測が経った(観測が見ら

れた)場合には、満期を待たずに中途解約を検討する必要がある。次の鉄則に纏められる。

鉄則3:満期直前にこれから増価(円高)に向かう予測が立った場合には中途解約を検討する

但し、こうした中途契約の場合には中途解約の手数料がかかる場合があり、あまりにもその中途解約手数料が高い場合には注意が必要となる。

次に、そうした時機を逸して増価(円高)の状況で満期を迎えてしまった場合、その段階で日本円に変換して受け取ってしまうと目減りの心配がある。そのため、次の対応が望まれるため、こうした対応が可能なのか確認が必要になる(一部は[1]等でも指摘されている)。

1) 外貨で保険金が決まっている場合、外貨での受け取りを行っておき、邦貨(日本円)には必要に応じて変換する形式を取ると、減価(円安)になった時機を待って邦貨(日本円)に変換すればよいので、そうした為替リスクの影響を軽減できる。この場合、外貨での受け取りができる外貨預金口座が必要になるので、外貨建て保険の契約者に対し外貨預金の口座開設を勧めるのは配慮の1つと言える。

2) 日本円で保険金を受け取るにしても、満期後もその保険金を(日本円に変換せず)据え置いおき、減価(円安)になるのを待ってから日本円に変換して受け取ると、満期時の増価(円高)をある程度回避できる。

これらは次の鉄則に纏められる。

鉄則4:増価(円高)で満期を迎えた場合はその段階で日本円に変換しない工夫が求められる

以下、その他の項目を取り上げる。

4. その他の項目

ここではその他の項目を取り上げる。

1 つには、外貨建て保険に対する様々な不要論・否定論に関するものである(例えば[10]など)。この項目を取り上げることで、外貨建て保険を推奨する意味になりはしないか、という問題が起きる。この中で(全ては取り上げないが)3点ほど取り上げる。なお、否定的な観点を取る場合も歴史的な遺物としても取り上げる意義はあると考えられる。

1) 通貨の種類を分散させるリスク分散上外貨建て保険では充分ではないのではないかと、という指摘がある。この点に関しては、外貨建て保険では確かに完全なるリスク分散とはならないが、日本円のみで持つ場合に比べれば意味がある。

2) 外貨を利用した保有方法については他に望ましい方法があるので、外貨建て保険であるべきではない、という指摘がある。確かに幾つかある中で外貨建て保険が最善の選択肢とはならない可能性がある。しかし、外貨建て保険については保険の1種として新社会人への勧誘なども行われる可能性があり、そうした観点でも、(入る・入らないは別にして)知る必要があると考えられる。また、

こうした各種比較まで取り上げると国際金融の科目の趣旨から外れてしまう面もある。

3) 外貨建て保険は生命保険というより資産運用の側面が強いので、保険機能を求めるなら外貨建て保険に入るよりは円建ての掛け捨て保険に入るべき、という論がある([10]など)。ここについては、外貨建て保険にはまだ掛け捨ての保険の商品が十分に普及していない[11]、という点を指摘しておく必要がある。そのため、アドバイスとしての妥当性はあるかもしれないが、公平な比較になっていない、という部分は指摘が必要となる。また、為替リスクはあっても生命保険の機能はある訳であり、単なる資産運用商品だけではない側面は無視できない。

但し、外貨建て保険を推奨するという立場での説明ではなく、あくまで外貨建て保険の持つ為替リスクの側面を取り上げる部分を注意して考える必要がある。

実際に、外貨建て保険では外国が比較的高利回りである状況を想定したモデル設計をしている。そのため、2020(令和2)年初頭での新型コロナ(COVID-19)を受けUSA(アメリカ合衆国)などでゼロ金利政策が取られたように、外国での利子率が急に下がると、US\$建て保険が日本生命で一時販売休止に追い込まれたように[7](現在は一部再開[8])、外貨建て保険では特有の特性がある事を理解する必要がある。現に、ギリシャ危機が起きてからはECB(ヨーロッパ中央銀行)によるマイナス金利の導入などの事案を受けて€建て保険の販売が休止になった事案もあり、日本で有名な外貨建て保険は主にUS\$建て保険と豪ドル建て保険が中心となっている。

講義で取り上げる事例紹介として、専修大学・経済学部・経済学科用2年次以上科目「国際経済論2(水1限)」において、2019年12/18(水)に実施した小テスト#2本試(34名受験)における特徴的に間違いが多かった側面を取り上げる。

・(正答率約38.2%)満期前解約について

(正)(今後)円高観測ならすべき(この後円高になるなら日本円換算で目減りするから)

(有力誤答)(今後)円安観測ならすべき

・(正答率約23.5%)保険金受取を遅らせるのは

(正)重要(円高時の円換算を遅らせる意義)

これらの面を考えても、講義で取り上げる重要性は大事と考えられる。

5. おわりに

ここでは外貨建て保険の国際金融・学部生用講義への取り込みの重要性を取り上げた。外貨建て保険は為替リスクを中心として従来の保険論にはない項目があり、新社会人が30年以上契約する可能性もある事から、学部での講義で取り上げる重要性は高い反面、従来の保険論とは出にくい観点が含まれることから、為替リスクを直接扱える国際金融の講義で取り上げる意義があるとb思われる。

(引用・参考文献)

- [1] 花輪陽子(2019)「外貨建て保険」のメリット・デメリットを解説!リスクやコストは高いものの、事前に理解しておけば「円建て」より高利回りで資産を運用できる可能性も」2019年5月27日 ZaiOnline <https://diamond.jp/articles/-/203347> (2020年7月14日接続)
- [2] 横川由理(2019)「外貨建て保険 投資に不適な“高”手数料 運用するなら外債で十分」2019年10月21日 週刊エコノミスト Online (2020年7月14日接続)
<https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20191029/se1/00m/020/061000c>
- [3] 両学長 リベラルアーツ大学「第66回 外貨建て保険は不要【お金の勉強 初級編】」2019年1月22日 <https://www.youtube.com/watch?v=jAGPtSzfBEg&feature=youtu.be>
(2020年7月14日接続)
- [4] 日本経済新聞(2020)「銀行窓販で外貨建て保険急減 19年4~12月、販売額2割減 説明せずさん、金融庁が問題視」2020年3月6日日本経済新聞電子版
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO56427040V00C20A3EE9000/> (2020年7月14日接続)
- [5] 生命保険協会(2020) <https://www.seiho.or.jp/info/news/2019/pdf/20200221.pdf>
(2020年7月14日接続)
- [6] 生命保険協会(2020)「外貨建て保険販売資格試験」の創設について」2020年2月21日
<https://www.seiho.or.jp/info/news/2020/20200221.html> (2020年7月14日接続)
- [7] 日本経済新聞(2020)「日本生命、外貨建て保険の販売休止 米金利低下で」2020年3月13日日本経済新聞電子版
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO56749150T10C20A3EAF000/> (2020年7月14日接続)
- [8] 日本経済新聞(2020)「日生、外貨建て保険を一部販売再開 金融不安が一服」2020年6月22日日本経済新聞電子版
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO60627850S0A620C2EE9000/> (2020年7月14日接続)
- [9] Takeshi Ogawa(2019)「国際経済論 2(水1限)-小テスト#2 本試解説 2019 後期-外貨建て保険(専修大学・経済学部・経済学科用)」<https://www.youtube.com/watch?v=dtbldKB64U>
(2020年7月14日接続)
- [10] 公務員専門FPチャンネル(2019)「外貨建て保険に入ってる公務員は要注意!メリットの皮をかぶったデメリット5つ【ドル建て保険・豪ドル建て保険など】」
<https://www.youtube.com/watch?v=EmEJb2CNpHI&feature=youtu.be> (2020年7月14日接続)
- [11] FP 法人 GAIA(2016)「どっちがお得?徹底検証「外貨保険 vs 円建て保険」」
<https://www.gaiainc.jp/private-fp/okane-kihon/1362/> (2020年7月14日接続)